

資料紹介「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」(1858 年)

米家 泰作

1. はじめに

京都大学文学研究科地理学専修には、主に教室草創期に蒐集された古地図コレクションがあり、教育・研究に活用されている(その多くは京都大学総合博物館に収蔵)。今年度、富山市で地理学実習の現地調査旅行を実施することとなり、当実習授業においても富山市に関わる古地図を熟覧する機会を設けた。それが、「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」(Vト 39, 写真 1。写本, 手彩色。以下, 本図と呼ぶ)である。

本図は、安政 5 年(1858)2 月 26 日に発生した飛越地震が常願寺川流域にもたらした災害、特に立山連峰での山体崩壊(鳶山崩れ)と、それによって生じた天然ダムの決壊にともなう土石流を描いている。本報告では、本図の資料紹介を行うとともに、既存の研究に依拠しながら、本図を理解する上で重要な視点や論点について整理する。そのことによって、今後の本図を用いた実習や、閲覧者への参考としたい。

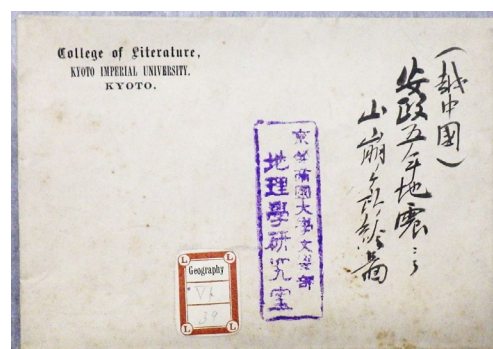
本図は図書登録されておらず、来歴は不明であるが、地理学専修の古地図コレクションには、加賀藩(金沢藩)ならびにその測量家・石黒信由にかかわる古地図が約 30 点含まれている。このことは、加賀藩関係者に由来する古地図群がまとまって伝来し、そこに本図も含まれていた可能性を推測させてくれるが、詳細は不明である。なお、本図右下には「観穴堂」と読める印記が認められるが、その由来についても不明である。



写真 1 「地震ニテ山崩之ケ所等絵図」(28×74 cm)の全容

写真 2 は本図の保管のために用いられていた封筒で、京都帝国大学文科大学(College of Letters)の封筒が用いられており、地理学教室草創期(1907 年の創設から 1910 年代にか

けて)に所蔵されたとみられる。なお、この封筒に記されているように、本図の資料名として「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」が用いられてきたが、本図には明確な内題・外題の記載はなく、この資料名は端書き(後述)に由来している。



2. 安政飛越地震の災害絵図

安政飛越地震発災時の災害情報の特徴や、そのなかでの絵図の役割については、少なからず研究蓄積がある(立山カルデラ砂防博物館

写真2 「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」が保存されていた封筒

1998, 嶋本ほか 2008, 災害教訓の継承に関する専門調査会 2009, 村田ほか 2012, 近藤 2014, 高野 2018 など)。その成果によれば、天然ダムの二度の決壊(1858年3月10日と4月26日)によって、常願寺川扇状地の広範囲に被害が及んだことにより、藩側の調査と情報集約、そして村落側からの報告や訴えが積み重なり、数ヶ月にわたる錯綜した情報発信とその集約が行われたことが知られる。そのなかで絵図は、災害の原因である上流部の山体崩壊について示したものと、下流部の土石流被害の状況や範囲を示すものに、大きく分かれる。

本図についてもすでに研究上の言及があり、金田章裕(2011:304-306)は古地図と災害の関わりを示す例として、本図と「信濃国大地震山川崩激之図」(1847年)について触れている。ともに、地震で生じた山崩れが天然ダムを生成させ、その崩壊が下流部に洪水を引き起こした出来事を描いた古地図であり、災害の原因と結果を捉えた点が興味深い。本図について金田(2011:305)は、「原著者・宛先などは不明であるものの、山崩れ・水害の状況を幕府に届けでるか、なんらかの正式な報告・説明のための地図の控えか下書きであった」と推測している。

また、高野靖彦は、安政飛越地震の災害を描いた古地図を体系的に調査するなかで、「安政大地震ニテ常願寺川流域欠壊之図」(金沢市立玉川図書館)と構図が類似する例として本図の存在に触れ、筆写者が「佐藤北翁」であることに言及している(災害教訓の継承に関する専門調査会 2009:107)。さらに高野は、『安政飛越地震の史的研究』で「災害情報の伝播と受容」について論じるに際し、改めて本図について触れた。ここで高野は本図の写真を掲載し、描画内容からは1858年5月中旬以降(二度目の決壊の後)の絵図を写したと推定されること、また筆写者は元金沢町奉行・佐藤北翁直簡だろうと推測した(高野 2018:87-91)。この推測が正しければ、本図が筆写された目的は、町方の武士層が災害情報の共有を図ることにあったと考えられる。

なお、高野が示唆するように、本図のように常願寺川上流部の山体崩壊と下流部の洪水被災地を一紙にまとめた絵図は幾つか伝存していることが知られるが、本図と全く同じ構図をとり、筆写関係が推測されるような絵図は、筆者が参照した文献では確認できなかった。

発災当時，藩と村落の双方から文字や絵図による報告が多く作成・筆写・共有されたことは，高野が的確に指摘するところであり，本図もその一つの系譜を示すものとして理解できる。

3. 「地震ニテ山崩之ヶ所等絵図」の内容

(1) 端書きと凡例

本図の端書き（写真3）には，「安政五戊午年二月廿六日地震ニテ山崩之ヶ所等絵図，借用写之，佐藤北翁」とあり，安政飛越地震の山崩れの箇所などを描くものであること，そして佐藤北翁が筆写したことが明記されている。この記載では山体崩壊が描画の主たる対象であるようにみえるが，常願寺川下流の洪水地域も本図の重要な表現対象となっている。

紙面の中央端に記された凡例（写真3）は，5つの色を挙げている。すなわち右から，

（茶色）此色安五戊午二月廿六日晨曉丑刻大震ニテ山崩ノヶ所

（鼠色）此色右山崩ノヶ所ニ溜リ池出来，其池同年四月廿六日泥出水致シ，其泥水入ノヶ所

（朱色）此色道

（緑色）此色山

（青色）此色川海并池ナリ，但シ山崩ノヶ所ニ有之，右出来ノ溜リ池ナリ，右崩所ニ有之地獄モ地震ヨリ出来ナリ

とある。ここから，山体崩壊（茶色）と天然ダム（青色），そして土石流（鼠色）が，本図の主眼であることがわかる。

さらに凡例には，次のように，2種の線の説明が添えられている。

新川郡ノ内，加州領・富山領ハ——（太線）系線ヲ以テ分之

富山領ノ内，同城城下——（細線）細系線ヲ以テ分之

これは，被災地が2藩にまたがるために，行政区画を明示したものである。土石流の末端は富山城下町にも届いており，そのことを示すために城下町の区画も表示された。

(2) 鳶山崩れの描画

続いて，常願寺川最上流部の山体崩壊を描いた，本図の上半分に注目しよう（写真4）。

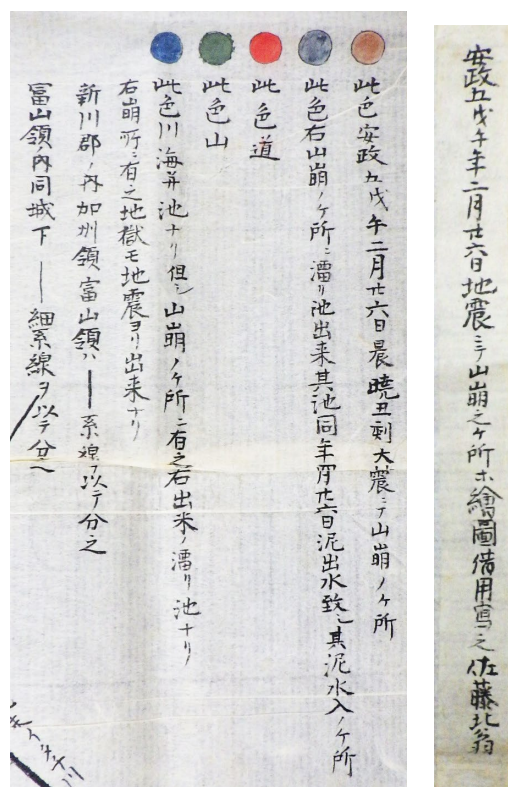


写真3 「安政五年地震ニテ山崩之ヶ所絵図」の凡例（左）と端書き（右）

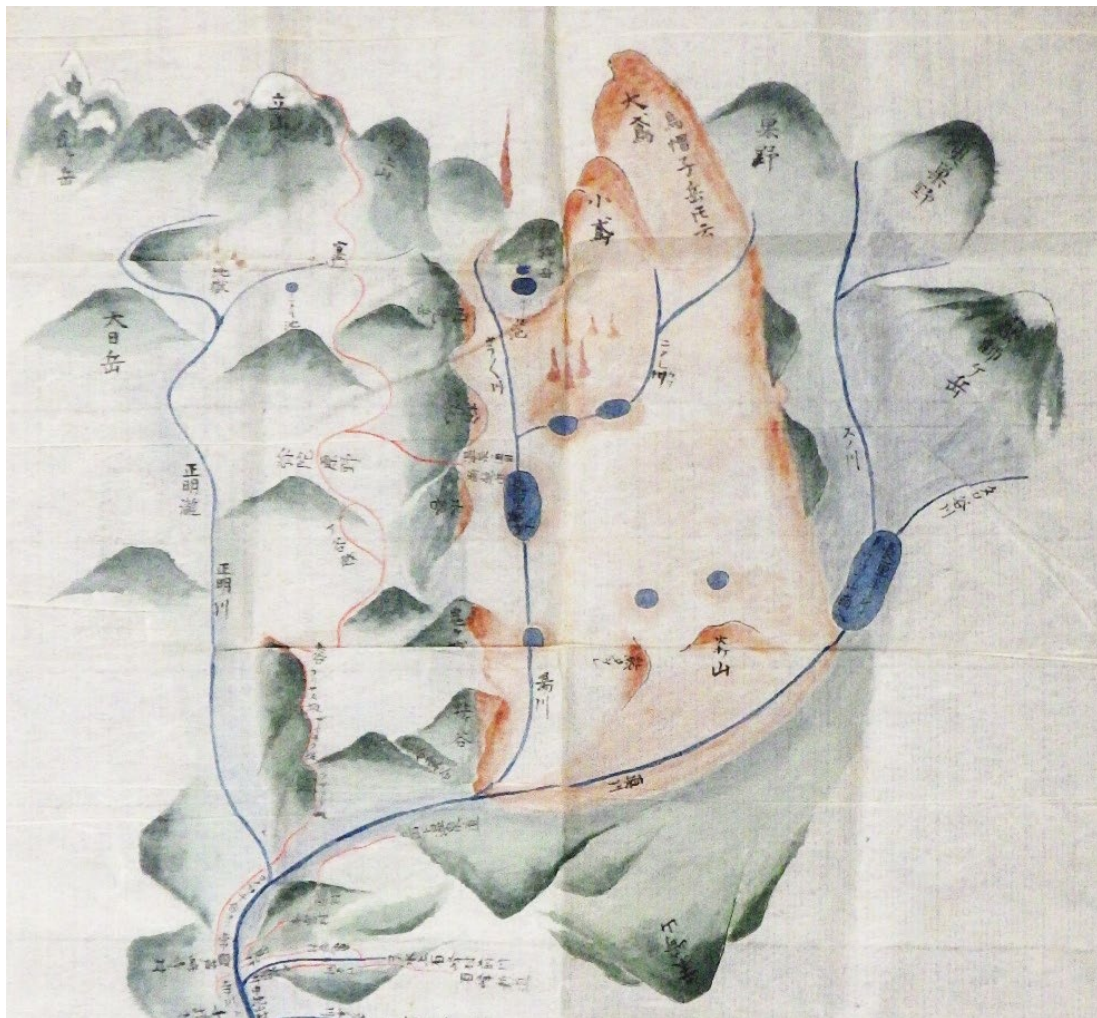


写真4 「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」(鳶山崩れ付近)

「大鷲」と記された山頂から、「湯川」と「真川」の合流点に至るまで、山崩れを示す茶色が広がり、その内部に池が点在している。ここはちょうど立山カルデラの核心部分にあたり、浸食によって円形の凹みが形成されるなかで、山崩れが引き起こされたことがわかる。そのなかで最も大きな池には「長一里、横廿丁」との記載があり、山体崩壊後に約4kmに及ぶ水域が形成されたことがわかる。また、「湯川」の上流が2つの支流にわかれる付近には、茶色の円錐状の描写が6か所あり、地震後に出現した「地獄」(温泉)を示しているようにみえる。

一方、「真川」の上流にも大きな水域があり、「長一里半斗(ばかり)、トウコウ山崩入」と記載がある。この池の下流は上記の山崩れ(茶色)で塞がれ、上流一帯は鼠色に着色されている。つまり、地震が引き起こした山崩れによって、「溜り池」が出現していた場所である。4月26日にこの天然ダムが決壊し、その土砂が常願寺川下流に奔流となって押し寄せ、甚大な被害をもたらしたわけである。本図中の池は、決壊後も残っていた水域だと理解され

る。

こうした描写が可能であったのは、当然ながら、現地の踏査が行われたからであり、「見分」が何度か実施されていたことが知られる（高野 2018：83）。ただし、山体崩壊地や天然ダムが崩壊した場所は、すぐには通行が困難であり、適当な場所から遠望によって状況が視認しれたものと想像される。

立山の信仰登山の歴史からみて、当山域は未踏の奥山であったわけではなく、写真4においても北方（左側）の弥陀ヶ原からの道（朱線）が、山崩れの場所に生じた池の近くまで伸びている。朱線の末端には「温泉通用断絶道」と記載があり、山崩れによってそこから先の道が失われたことが記されている。ここはちょうど、立山カルデラの縁にあたり、例えばここから遠望すれば、本図に描かれた情報のおおよそは知ることができたと推測される。

（3）土石流被害地の描画

次に、常願寺川扇状地一帯を描いた本図の下半分に注目する（写真5）。ここには、4月26日の天然ダム決壊によって生じた「泥水」（土石流）が及んだ範囲が鼠色で描写されており、その内外に村落名が記され、被害に遭った村々の分布を知ることができる。また2つの藩ごとに被害の概況がまとめられており、本図右側には、「富山領ノ内御田地泥水付一万石斗（ばかり）、同泥入家千軒斗、泥入村并流失家暨（および）溺死人未詳」との記載がある。また左側には、「加州領新川郡、泥入御田地二万二千石余、溺死人三百斗、流失家・損家合千五百軒斗」とある。概数での報告になるが、被害は常願寺川本流沿いの加賀藩領で大きく、土石流によって埋没した農地もさることながら、流失した家屋や、溺死した人々の多さに驚かされる。こうした被害の大きさの背景には、一度目の土石流（3月10日）の後、復旧のために村落に帰還した人々が、より大規模な二度目の土石流に遭遇したことも大きかったとみられる（高野 2018：72）。

被害をうけた村落の分布について、見ておこう。右岸（東岸）では常願寺川扇状地の扇頂にあたる岩嶺寺村のすぐ北から被害がみられ、高荒屋村（現大清水）、高原八ツ屋村、半屋村、利田村、曾我村、塚越村など、なかには常願寺川本流から1 km 以上離れた地点まで被害が及んでいたことがわかる。最下流部では白岩川が被害の東限となった。ただし、近藤浩二（2014）によれば、左岸の下流部のうち常願寺川と白岩川に囲まれた地域については、「洪水」の被害がなかった島状の地域を記す絵図（「安政五年常願寺川非常洪水山里変地之模様見取図」）も伝わっており、それと対照的に本図は一面に被害があったように記している。近藤は、常願寺川扇状地が「一面の泥の海」になったという理解に対して、被害のなかった微高地が各所にあった可能性を示唆しており、その点を考慮すれば、本図が描く被災地は、被害地域の外周を捉えたに過ぎないといえる。

一方、左岸（西岸）では、扇頂からすぐに被害があったわけではなく、西番村や大場村付近から被害がみられ、清水又用水からイタチ川にかけてが泥流の西限であったように描かれている。具体的には、西番村、新名村、太田本郷村、山室江口村、公文名村（現在の富山地方鉄道不二越駅付近）、そして富山城下町に及び、最後には神通川が西限となった。つま

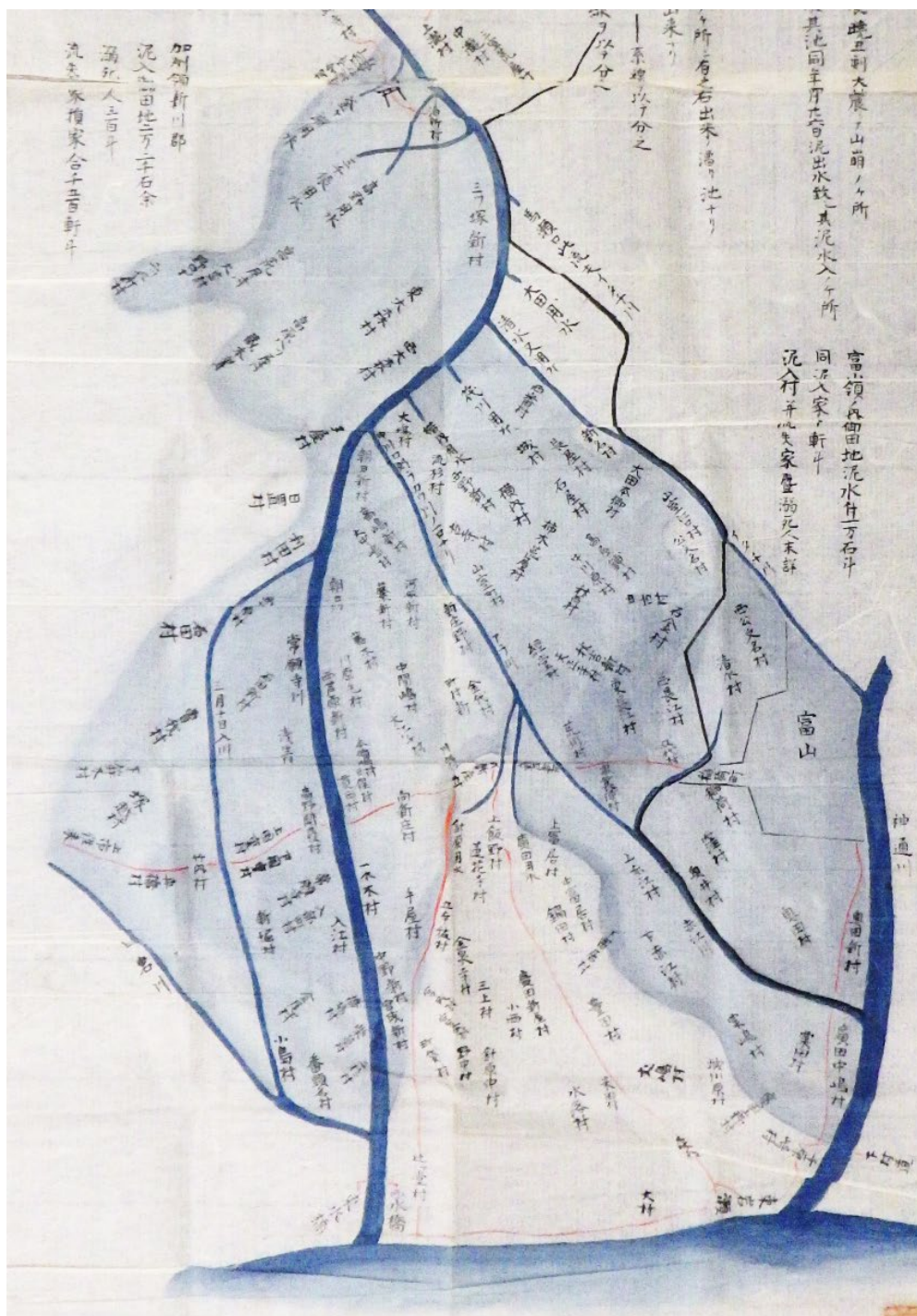


写真5 「安政五年地震ニテ山崩之ヶ所絵図」(常願寺川扇状地一帯)

り常願寺川本流から 5 km ほど離れた地点まで、泥流が及んだとみられる。

こうした被害の広がり方は、もちろん流下した土石流が大規模であったためであるが、流れが散開しやすい扇状地地形ならではの特徴であったといえる。この時の土石流によって運ばれてきた巨石の幾つかが、災害の記憶を伝えるものとして保全されている（写真6）。



写真6 西番の大転石（左）と供養塔

筆者撮影，2025年11月12日。

ただし、右岸のなかでも、新庄村や上飯野村付近（現在の富山地方鉄道東新庄駅付近）から海側の一帯には、被害が及んでいない。扇状地のなかでも微高地になっていたためか、土石流の流れが東西に二分され、被害を免れたとみられる。ちなみに、新庄町の近隣に記念碑（1890年、写真7、広田用水記念公園）が建立されているのは、ちょうど泥流に囲まれるようにして生き残った人々の記憶を表したものだともいえる。その碑文末尾にいう「親戚旧友相集、共計誌石、為令往昔地変事知後世、噫呼不悲傷哉」（死者の親族や旧友が過去の災害の史実を後世に伝えるべく、ともに計画してこの石碑を建立した。何と悲しいことか）の語は、今なお胸を打つ。

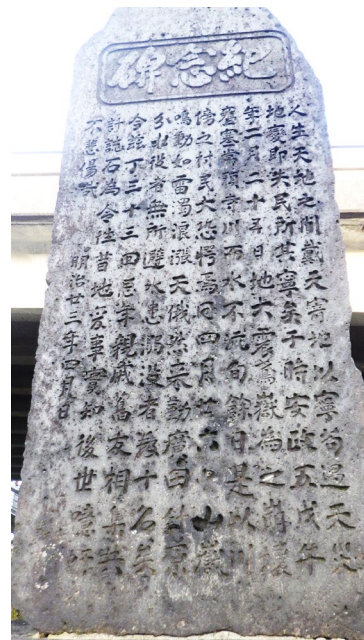


写真7 安政飛越地震水害記念碑

筆者撮影，2025年11月12日

4. おわりに

小稿では、京都大学文学研究科地理学専修が所蔵する「安政五年地震ニテ山崩之ケ所絵図」の資料紹介を行うとともに、本図を理解する上での視点や論点について整理した。

簡単にまとめておくと、本図は来歴が不明ながら、安政5年（1858）の飛越地震時の土石流災害について、加賀藩の関係者が筆写したものであり、災害の原因（上流部）と結果（下流部）を一紙に描くという特徴がある。類似の構図をもつ絵図はほかにも知られているが、本図を含め、幾つかの系統がある。上流部ではおそらく調査者の遠望にもとづいて山体崩壊後の状況が捉えられており、対照的に下流部では被災地域の外周を示し、その内部の村落の分布を平面的に描くものとなっていた。

本地理学専修の古地図コレクションには、災害絵図として、ほかにも「浅間山焼之図」（Vへ32、手彩色）や、金田も触れた「弘化丁未信濃国大地震山河崩激之図」（Vト29、木版多

色刷)が伝わっており、研究・教育に活用されてきた。本図「安政五年地震ニテ山崩之ケ所
絵図」もまた、災害と社会の関係を示す貴重な資料として、今後も活用していくことが望ま
れる。

文献

金田章裕 (2011).『江戸・明治の古地図からみた町と村』敬文社.

近藤浩二 (2014). 変地所分間絵図に見る常願寺川大洪水. 災害・復興と資料 (新潟大学) 4, 12-22.

災害教訓の継承に関する専門調査会 (2009).『1858 飛越地震報告書』中央防災会議.

嶋本隆一・高野靖彦・前田一郎 (2008). 安政大災害 (1858) における加賀藩の災害情報と被災対応. 立山
カルデラ研究紀要 9, 21-57.

高野靖彦 (2018).『安政飛越地震の史的研究—自然災害にみる越中幕末史—』桂書房.

立山カルデラ砂防博物館 (1998).『越中立山大鳶崩れ—安政五年大地震大洪水の古絵図集成—』立山カル
デラ砂防博物館.

田畑茂清・水山高久・井上公夫・杉山 実 (2000). 鳶崩れ (飛越地震, 1858) による天然ダムの形成と決
壊に伴う土砂移動の実態. 砂防学会誌 53(1), 59-70.

村田 晶・安達 實・宮島昌克 (2012). 藩政期の絵図にみる飛越地震. 土木史研究講演集 32, 13-16.